

2015.JAN.

2

弾射音 わが手は翼
われは鳥

栗林元 薔薇の刺青(二)

murbo 機械腿現る!の作り方

ショートショート
アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか?
付録:機械羊の3DCG AR

無料
FREE

翌日、津田から入国管理局
の資料がファックスで届いた。

早速例の電話を入れた後、電話
で調査に入った。謄本の生田の住
所から電話を調べたが、電話して
みるとすでに電話は使われていな
かった。

そこで、その住所のある中区役所へ
行き、住民票を調べた。こういったときの
為に私は行政書士の資格を持っている。

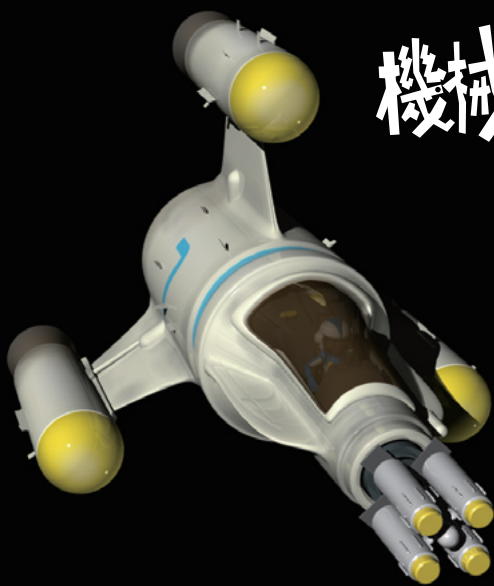
続きを読む

薔薇の刺青

ダクト

(二)

栗林元 Kuribayashi Hajime



機械恐竜現る! の作り方
murbo

第2回
銀河パトロール
制式戦闘機
ヴァルター 7

続きを読む

弾射音

Dan Shannon

2

わが手は翼 われは鳥

大きな白い車が、学校の正

門のすぐ外にとまっていた。

哲郎は信也の前に立って、さっさと歩いていき、うしろのドアをあけた。

哲郎が車にのりこんでも、信也はひらいたままのドアの横で気おくれして立ちすくんだ。

「のれよ」

哲郎が車の中から言った。信也はおそろおそろ足を踏みいれ、シートにからだをあげた。パパの車とはずいぶんちがう。信也は思った。ドアが大きい。なかも広い。シートはなんだか固い。でも、ドアの内側の取っ手は似たようなかたちだ。

「ドアをしめろよ」

続きを読む

薔薇の刺青

栗林元

近日刊行予定



弾射音

発売中!



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>

わが手は翼 われは鳥

2



「哲郎の母です。よろしくね」

「は、はい」

哲郎のおかさんが前向きなおる。

車が動きだした。

「いつも哲郎と仲よくしていたいてうれしいわ」

運転しながら、哲郎のおかさんは信也にそう言った。

信也は緊張して、ろくに返事もできなかった。この人は

ほんとにばくが相沢くんの友だちだと思っているのだろ

うか。おとなからみれば、おなじクラスのこどもはみな

友だちになってしまふのかもしれない。信也はそう思っ

た。信也自身は、哲郎と友だちだという意識はな

かった。そもそも友だちになるきっかけなんて

なかったのだ。

それとも、相沢くんはぼくのことを友だちだって、お

かあさんに話したのだろうか？

数分で、車は郊外のマンシヨンの駐車場にはいった。

「すわれよ」

信也は応接間に通された。哲郎はランドセルをソファ

に投げ出し、その横にすわりこんだ。

信也はランドセルをソファの下に置き、哲郎の正面に

おすおすとした。

高級そうなマンシヨンだった。

ドアがひらいて、哲郎のおかさんがトレイにオレン

ジジュースのはいつたグラスをふたつとケーキをふたつ

のせてはいってくる。にこにこしたままそれを信也と哲

郎の前に置く。ゆつくりしてつてね。そうやって、哲郎

のおかあさんは出ていった。

「ほんとにゆつくりしてつていぞ」

哲郎が言った。オレンジジュースのストローをくわえ

いっけに半分飲んでしまふ。

なにも言うことがでなくて、信也はオレンジジュー

スを少し飲み、ケーキを少しかじった。哲郎はふんぞり

かえってケーキをほおばっている。

どうして相沢くんはきゆうにばくを家に招いてくれた

んだろう？信也は哲郎の考えていることをおし

はかりかねた。信也を見る目は、このあいだと

おなじように、からかっているみたいだ。パイ

ロットになりたいという作文のことで、まだか

らい足りないのだろうか。それとも、すなお

に友だちになってくれと言えないだけなのだろ

うか。

しかし、信也自身、哲郎とはちがう世界の人

間だという気持ちがしてならないのだった。こ

んな高級なマンシヨンにつれてこられれば、な

おさらだった。

哲郎が、からになったグラスをテーブルに置

いた。

「子分にしてやる」

そう言った。

はつきりとした声で。

「え？」

「だから、おれの子分にしてやるってば」

不敵な笑みを顔にうかべて、哲郎はくりかえ

した。

「……どういこと？」

「おれの子分になったら、空を飛ぶ方法を教え

てやるぜ」

「だから、ぼくはパイロットになって……」

哲郎は笑った。

「けつ。ばかだな。なんと言えはわかるんだ。

パイロットになったつて、ほんとに空を飛ぶこ

弾射音

Dan Shannon

大きな白い車が、学校の正門のすぐ外にとまっていた。
哲郎は信也の前に立って、さっさと歩いていき、うしろのドアをあ
けた。
哲郎が車にのりこんでも、信也はひらいたままのドアの横で気お
く
れして立ちすくんだ。
「のれよ」
哲郎が車の中から言った。信也はおそろおそろ足を踏みいれ、シー
トにからだをあげた。
パパの車とはずいぶんちがう。信也は思った。ドアが大きい。なか
も広い。シートはなんだか固い。でも、ドアの内側の取っ手は似た
ようなかたちだ。
「ドアをしめろよ」
哲郎は少しいらしたような声で言う。哲郎は取っ手をひっぱ
つ。
「哲郎、お友だち？」
車の前の席から声がした。
女の人の声だった。
運転席にすわっていた女の人がふりかえり、シートとシートのあい
だから顔をのぞかせた。にこにこ笑っている。
きれいな人だった。
「うん」
「よ、吉田といます」
信也が緊張してそう言うと、女の方はますますにこにこした。

となかでできやしないんだ。飛ぶのは飛行機だけだ。パイロットはそれを操縦するだけなんだ」

「でも、それが空を飛ぶってことだよ。ほかにあるの？」

「飛行機なんかにのらないで、自分の力で飛ぶんだよ」

信也はあつげにとられた。

ひよっとしたら、頭がおかしいんじゃないだろうか。

「おれの頭がおかしいんだと思ってるんだろう」

「そ、そんなことは……」

「いいよ、べつに。どうせわかりっこないんだ。でも、人間が自分の力だけで空を飛ぶ方法はぜったいにあるんだ。自分になったら、それを教えてやるうって言ってるんだ」

「……人間は鳥じゃないから、飛行機やヘリコプターにのらないと、空を飛べないんだよ」

「ぜったいに、そうだって言えるな」

哲郎の声が低くなった。信也をこわい目でにらみつけている。信也は背筋がぞくぞくとした。

「……ほんとに、あるの？」

「あるさ。教えてやるよ。だからおれの子分になれ」

「子分になったら、なにをやるの？」

「なにもしなくていい。ただ、おれといっしょに空を飛ぶだけだ。だけど、おれが命令したときは、ぜったいに空を飛ばなくちゃだめだ」

信也はことばにとまった。

哲郎が立ち上がった。

「おれの部屋にこいよ。合格だ」

「ちょ、ちょっと待って！まだ子分になるってきめたわけじゃ……」

「いいから、こいよ」

哲郎はふりかえり、さつさとドアを出ていった。信也はあわてて立ち上がり、ランドセルを取って、哲郎のあとを追った。ケーキもオレンジジュースも、半分以上のこっている。

廊下に出ると、哲郎がべつのドアをあけてはいっていくところだった。信也はそのドアのところまで行き、中をう

かがった。

「はいれよ」

部屋の中から、哲郎が背を向けたまま言う。まるで泥棒のように、信也は足音をたてないようにそと足を踏み入れた。

哲郎の部屋だった。信也とおなじ、小学四年生の男の子の部屋。でも、信也の部屋とはぜんぜんちがっていた。なんて殺風景なんだろうというのが、信也の第一印象だった。信也はいつもおもちゃや本を部屋じゅうにちらかして、ヘッドの上までからくだらけになってしまい、ママにしかられてやつと足の踏み場をつくる程度にかたづけられるのが、哲郎の部屋はまったくちがっていなかった。まるで人が住んでいないかと思えるほど、整然として、きれいにそうじされていた。

それから、まるでおとなの人の部屋のようなことに気がついた。おもちゃらしいおもちゃが、まるで見あたらなかった。ゲームの機械も、ゲームのパッケージも、マンガの本も、プラモデルもない。そのかわり、壁の一面がそっくりそのまま天井までどく本だになっていて、ぎっしりと本がつまっていた。

部屋のまんなかに、透明のテーブルとおいたたみのイス、大きな窓の横には、黒い大きな机。机の上にはまっ白なパソコンとペン立てとライト。カーベットのしも、まるでチリひとつ落ちていないようにきれいだった。ベッドも、まるでデパートにならんでいる展示品のように、きれいにシーツがかけである。

かざり棚には、およそこどもらしくない置物がぼつんぼつんとならんでいるだけ。

そして信也は、部屋の中があまりに整然としているのは、物があまふりからではなく、部屋が哲郎の部屋の四倍も五倍もひろいからだということに気がついた。

「すわれよ」

哲郎が部屋のまんなかのおりたたみイスを指さして言った。

信也はドアの横にランドセルを置いて、なるべく部屋の中をきよきよきよしないように気をつけながらイスに近づき、浅く腰をおろした。

でも、目はどうしても大きな本だなにいつてしまうのだった。

机の前に腰かけながら、それに気づいた哲郎が言った。

「すこいだろ」

「うん。図書館みたい」

哲郎は笑った。

「子分になるなら、好きな本を貸してやるぜ」

「ほんと？」

信也は思わず目をかがやかせて哲郎を見た。

「うそはきらいさ」

「ちよっと見せてね」

信也は立ち上がり、本棚に近づいた。

大きな本は下のほうに、小さな本は上のほうに、きちんとならべられている。本が二列にならんでいるところも、倒れているところもなかった。

しかし――。

学習図鑑や、児童文学全集もたしかにあった。でも、それらは、すみっこのほうにたためてあって、たな全体からすれば、ほんの一部分なのだった。

本のほとんどは、こども向けのものではなかった。おとなが読むような、ふつうの本だった。

背表紙のタイトルを見て、もつとびつくりした。

催眠術、冥想、神秘、魔術、ヨガ、心靈術――。

信也は目をみはり、それから少しこわくなった。

「どうした？」

超能力とか魔術とか幽霊のマンガは、数え切れないほどある。雑誌のついている三分の一が、そういう話のものであることはたしかだ。信也もそういうマンガはきらいではない。

だけど、これはマンガじゃない。どうやら、まじめにそのことが書いてある、おとなの本なのだ。きつと、魔術のやり方が、ちゃんとそのまま書いてあるのだ。

信也は本だからあとずさりした。

「あ、相沢くん、こんな本ばかり読むの？」

「なんだよ、気味が悪そうな顔して」

「だって——」

哲郎はニヤニヤ笑っている。信也がこわがっているのを楽しんでるかのようだ。

クラスのほかの子にはこのことを言わないでおこう。信也は思った。相沢くんがこんな本をこんなにたくさん持っていることを話したら、みんな、ますます相沢くんを避けるようになってしまふ。

いや、相沢くんの家に招かれたことじたい、言わないほうがいいかもしれない。

「ジェ、ジェット機とかの本はないの？」

信也はかすれる声で言った。

「ばか。なんべん言ったらわかるんだよ。おれは飛行機なんかには興味ないんだ」

信也はけっきょくどの本も手に取らず、イスにもどって腰をおろした。

「——相沢くんは、魔術をやっているの？」

「やったこともあるよ」

哲郎は平然とした顔でこたえた。

「ひよっとしたら——悪魔を呼び出せるの？」

「ははは。そんなこと、できねえよ。おまえ、おれが悪魔の手下だと思ったのか」

信也はあわてて首を横に振った。

「魔術や超能力が好きなのじゃないんだ」

哲郎は本だから一冊、手に取り、そのページをべらべらめくりながら言った。

「ぜんぶ、空を飛ぶ方法を調べるために買ったんだ」

「魔術で空が飛べるの？」

「そうじゃない——だけど、似たようなもんかな」

哲郎は本をたなにもどし、信也に歩み寄った。

「子分だから、教えてやる。だれにもしやべるなよ」

信也はうなずいた。

「ぜったいだぞ。約束するな？」

哲郎が、こわい目で信也をにらみつける。信也はどきどきしながら、もう一度うなずいた。

「おまえ、空を飛ぶ夢を見たことあるか」

「う、うん。あるよ」

「じゃあ、見込みあるな。おれは幼稚園のときから、しょっちゅう空を飛ぶ夢を見てたんだ。すごいリアルな夢なんだけ。あんまりリアルすぎて、目がさめるときとぜんぜん区別がつかないくらいなんだ。目がさめると、いつもやしくつてさ。なんでこれが現実じゃなくて、夢なんだろうって、ふしぎな感じだったんだ」

「ぼくもそういうときあるよ」

「□はさむなよ——それで、あるとき、本かなにかで読んだんだ。夢で見たことを現実にする方法があるってな。アメリカの先住民が使う魔術みたいなもので、そういうのがあるらしいんだ。それで、魔術のことが書いてある本をかたっぱしから集めて、読んだんだ。そしたら、人間は太古から、世界中で、そういう魔術を発明して、空を飛んでいたことがわかったんだ」

「なんだか、うそみたいだな」

「おれの言うことが信じられないのか！」

「そ、そうじゃないけど」

「子分だろ？」

「子分になったつもりはあいかわらずなかったが、信也は思わすうなずいてしまった」

「で、魔術で空を飛べるようになったの？」

哲郎は信也をにらみつけた。だが、すぐに目をそらし、くちびるをかんた。

「まだだよ。だけど、どうやってやればいいかわかったんだ。もう少しなんだ」

信也はため息をついた。なんとなく、ほっとしたのだ。

哲郎が言ったことがぜんぶほんとうだったら、もしも哲郎が魔術で空を飛べるのだとしたら、こわすぎてがまんできないと感じたのだ。

「じつさいに空を飛べるようになるには、まず、夢の中で自由に空が飛べなくちゃだめなんだ」

そう言いながら、哲郎は机のところへ行き、ひきだしをあけてなにかを取り出した。

「現実とかわからないくらい、はつきりした夢が見られるようにならなくちゃだめなんだ。空を飛ぶ、はつきりとした夢さ」

哲郎はふたたび信也に近づいた。

そして、信也の目をのぞきこんで、

「空が飛びたいんだろ？」

信也はうなずいた。

「子分だから、おれの言うとおりにするんだぞ。おれの言うとおりにしてりや、パイロットになんかならなくてもいいんだ」

哲郎は信也の前にひざまずいた。

「イスの背にもたれる。からだの力を抜け」

信也は言われたとおりにした。でも、なんだかうまくからだの力を抜くことができなかった。

哲郎は手にぎっていたものを信也の目の前にかざした。

銀色の鎖がついた、透明の振り子だった。

哲郎はそれを信也の顔の前で振りはじめた。

「さ、催眠術？」

「そうだよ」

「や、やだよ。こわいよ」

「言うとおりにしろって！こわがることなんかないんだ。はつきりと空を飛ぶ夢が見られるようにしてやるだけなんだから」

「ぼ、ぼく帰る」

信也はイスのひじをつかんで立ち上がろうとした。

哲郎がイスに押しもどした。

「いかげんにしろ」

信也は哲郎を見上げた。

鬼のような目だった。

まるで、おとなが真剣に怒ったときのような目だ。

信也はおそろしくなった。

「おれの言うとおりにするまで帰さないからな」

哲郎はふたたび信也の目の前に振り子をかざして、振りはじめた。

「からだの力を抜いて、振り子を見つめろ」

信也は揺れる振り子を見つめた。

「からだの力を抜くんだよ」

イスのひじを両手でつよく握りしめていることに気づいて、信也は手をはなし、肩の力を抜いた。

「そうだ。いいぞ。じゃあ、いまから数をかぞえる。五つかぞえたら、おまえの目は閉じる。目を閉じたら、おれの言うとおりのものが見えるようになる。いいか、いくぞ。いち、に、さん、し、ご……」

信也のまぶたが重くなっていた。

哲郎が、振り子を振りながら、もう一方の手で、指をパチンと鳴らした。

同時に、信也は目を閉じてしまった。

目をひらこうとしたが、できなかった。

しん、とすずまりかえった中で、哲郎の声だけが、なぜかとても澄んで聞こえる。

「おまえの心は落ちついている。からだがりラックスしている。どんどん、どんどんリラックスしていく。いい気持ちだ。いい気持ちだ。楽しい気持ちだ。だんだんだんだん、楽しく、楽しくなっていく。おれがもう一度、指を鳴らすと、おまえは空を飛んでいる。おまえは町の上を飛んでいる。ずっと下のほうに、家がならんでいるのが見える。電車が走っていく。自転車や車が道路を行き来している。おまえはどんどん、どんどん高くのぼっていく。遠くの山も、下のほうに見える。おまえは雲の上に出る。わたあめのような、白い、ふわふわした雲が、おまえのからだの下を、風につけて流れていく……」

パチン！

信也の耳から、哲郎の声がしだいに消えていった。



続く

翌日、津田から入国管理局の資料がファックスで届いた。

早速例の電話を入れた後、電話で調査に入った。膳本の生田の住所から電話を調べたが、電話してみるとすでに電話は使われていなかった。

そこで、その住所のある中区役所へ行き、住民票を調べた。こういうときの為に私は行政書士の資格を持っている。もともと行政書士としての仕事は、資格を維持する程度に法律事務所から回してもらったのだが。

マリアンは外国人なので、各種届け出はその所在地でしなければならない。結婚している以上、たとえ別居していたとしても、名目の住所は生田と同じにしていたはずだ。

住民票を調べた結果、マリアンの永住資格の取得と同じ頃に、二人は離婚していた。同時に彼女の足取りが住民票から消える。しかし、生田の新しい住所は辿ることができた。同じ中区の中で移動していた。

生田が律儀に届けを出しているため、午前中に調べが完了したのだ。

早めの食事をすませて中区の栄四丁目にやって来た。区役所から歩いて十五分ほどの距離になる。同じ中区の錦三丁目と並ぶ名古屋の歓楽街で、俗に女子大小路と呼ばれる一角に近い。

夜になればぶったくりバーの客引きや、きらびやかなネオンの光とカラオケの音で賑やかなのあたりも、まだ日の高い今時は、惺眠をむさぼる年増女のように薄汚くみじめなだけだ。

酒屋の軽トラックが往来し、柳橋の卸売市場で食材を仕入れた板前や料理人が仕込みに追われる様子が、開け放たれた店の裏口からのぞく。街は今夜に備えて化粧を始めていた。

生田の住むマンションはそこにあった。

赤煉瓦の十二階建てで、入り口にはブロンズ製のライオンが座っている。建物全体に、成金趣味の嫌味な装飾

栗林元

Kuribayashi Hajime

薔薇の刺青 (二)

が施され、ネオンの街を見下ろすように立っていた。駐車場には手入れの悪いアメ車が所狭しと並んでいる。

場所柄なのか、水商売（業界では、さんずいと呼んでいる）、極道関係者が数多く入居していることで有名な、あのマンションだった。

階の郵便受けでルームナンパーを確認してエレベーターホールに向かう。

降りてきたエレベーターのドアが開き、ジャー

ジ姿の若い女がゴミ袋をぶら下げて出てきた。ビーチサンダルを引きずるようにして歩いてい

る。起き抜けのホステスだろう。

女と入れ違いにエレベーターに乗り込むと、

八階のボタンを押した。所々ペンキの剥けた壁

面に釘でひっついたような落書きが無数にあつた。ほとんどが性的なもので、ところどころに、

やくざ出て行け、というような文字が書いてある。ここは安アパートではない。しかし、精神的

のスラム街であることは確かだった。

生田の部屋には表札が出ていなかった。ドアの外には店屋物のどんぶりが積み重ねられ、その

間を黒いゴキブリが入り出している。その一方で、ドアノブ、ランプシェードなどの意匠が

ロココ調を模して高級感を演出しようとしているのが滑稽だ。

ドアの向こうからは、麻雀パイをかき混ぜる音と、男たちの高笑いがかんてきた。平日の午後一時、まっとうな人間の遊んでいる時間ではない。

チャイムを押すと、一瞬部屋の中が静まりかえり、やがて、ドアの向こう側でレンズ越しに私を伺う気配がした。

キーの合く音が意外に大きく廊下に響き、ドアが細く開くと、低く押し殺した声が言った。「誰や？」

「奥さんにお会いしたいんですよ」

「だから聞いとるやろうが、誰やおまえは」わざと作ったような関西弁まりだった。

「マリアン・バドレスさんを探しているんですよ。妹さんに頼まれましてね」

ドアがすぐに閉まるうとしたが、私の足がそれをやましている。

「入管か、おまえ！」

「探偵ですよ」

高ぶった声に、静かに答えた。部屋の中はしんと静まりかえっている。ドアが開くと、部屋の中のとつとする熱気が押し寄せてくる。煙草の匂いがした。

どんよりとした表情の男が立っていた。若作りのパンチパーマと鼻下髭が、四十近い年齢の男を、より貧相に見せている。

「探偵の高御堂といいます。生田さん？」

男はむつとりと押し黙ったまま、ゆつくりと頷いた。入国管理局を異様に恐れているようだ。生田に揺さぶりをかけるために、あえて直調に出て

みたのは正解かもしれない。直調とは直接調査を略した業界用語で、被調査人に直接会う調査のことだ、通常はやらない。

「マリアンとはもう別れたんだよ」

「今、どこにいるかはわかりませんが」

「知らねえよ、あんなひどい女」

「ひどいと言つて？」

「永住権を取ったとたん、はい、さようならときやがった。それでも俺はマリアンを愛していたんだぜ」

いつのまにか関西弁が消えている。彼の関西弁は人を脅すときだけなのだろう。

「どこで働いているかの心当たりでもないですがね」

「知らねえな。ぶいっと出て行つたきり音沙汰

なした。そんなことより、マリ안의妹が日本に来ているのかよ。一度挨拶に来るように言ってくれよ。どうせいい女なんだろう。姉ちゃんと同じようにかわいがってやるぜ」

そう言つて下卑た笑い声を上げた。部屋奥からも押し殺したような含み笑いが聞こえてくる。

生田の肩越しに室内が見えた。ビールの空き缶が転がり、半開きのスポーツ新聞が床に落ちていた。雀卓を囲んだ三人の男たちが、鋭い視線で私を見つめていた。暴力の臭いをぶんぶんときき散らし、それを隠そうともしない人種だ。

生田は私に同意を求めるかのように、さらに性的なジョークを話して自分で笑ったが、私は笑わなかった。

生田は、頬にへばりつけた薄ら笑いを気まずそうにひっこめると言った。

「こっちは被害者のようなもんだ！こそこそ嘆きまわつてくれるなよ、えつ、探偵さんよ。俺たちにもプライバシーだってもんがあるからよ」

そう言う、私の鼻先で思いつきりドアを閉めた。同時に部屋の中から、どつと爆笑が湧いた。再び麻雀の始まる音がする。

その音を背中であきながら、私は部屋を後にした。

午後三時過ぎに、テッシの住むマンションに電話をかけた。プロダクションが寮として借りている賃貸マンションだ。二DKの部屋に六人のフィリピン娘が寝起きしている。

という。

電話を取った娘のたどたどしい日本語に、たどたどしい英語でテッシを呼んでくれるように頼んだ。

彼女たちは本国の家族に少しでも多くの仕送りをするために、休みの時間でも表へはあまり出ず、部屋で過ごすことが多い。プロダクションの中にはそんな事情を察してテレビゲームを置いておくところもある。もつとも朝まで続く労働に疲れ、外へ出るだけの元気が残っていない

ないこともあるだろう。

「パドレスさん？」

「おー、タカミドさん。何かわかりましたか」

「生田に会いました。お姉さんとは離婚しています」

「マリアンは、」

まだ、という私の言葉に、落胆した気配が無言のうちに伝わってきた。

「ところで、ミス・パドレス」

「テッシでかまいません」

「あなたの友人で日本人と結婚をしている人はいないだろうか。お相手をブローカーから紹介された人ね」

つまり、偽装結婚をあっせんするブローカーに心当たりはないか、と問いつたのだ。

「ちよつと待つてね」

そう言つてテッシは電話の向こうで何か言っている。早口なタガログ語なので私にはわからない。

「お待たせ、タカミドさん」とテッシが受話器の向こうに戻ってきた。

「友達、あなたに会うの怖い、言っています。でも結婚屋さんに教えてくれました。言います、いい？」

私はあわててメモを出した。彼女たちは入国管理でかなり怖い思いをしてきたのだろう。それに街中の交通検問などでもパスポートチェックを要求されれば拒むことができない。そこでオーバーステイが発覚すると、その場から強制送還に向けての手続きが否応なく進行していくのだ。

テッシは二人の男の名前と電話番号を告げた。番号から見て二人とも名古屋市内に住んでいるようだ。

私は、最近増えている「じやばゆきさん」を取材している風俗ライターという設定で電話調査を試みた。雑誌の前としては、「ポスト」や「現代」ではなく、「アサヒ芸能」などとならぶ某芸能ジャーナルの名前を出した。刺青のグラフィアや、風俗街の体験ルポが売りになっている、あの雑誌である。

一人目の男は、面倒くさそうに断られた。しかし、二人目の男はかなり好意的に話に乗ってきた。

「じやばゆきさんの日常と、その中に埋もれたいろんなエピソードを、是非聞かせて欲しいんです」

「気持ちにはわかるんだけどね、現に商売をしている俺の立場だとちよつとね。あの、まずいんですよ」

「お会いしたいんです」

「悪いけど無理だな。他の業者へのかねあいもあるし、それに最近ヤーさんがつるさくてね。わかるだろう」

そう言つた後、男はしばらく考えて、今は現役を引退した結婚ブローカーを紹介しようと言つた。

「あいづな、もう内部の人間じゃないから大丈夫だろう。金に困つてるみたいだから、謝礼さえ払えば面白い話が聞けるかもな」

私が礼を言うと、男は、お宅のグラフィアにはお世話になつてからと、自嘲気味に笑つた

男が紹介してくれたのは金井という名の男だった。早速、アポイントを取ろうと電話をする。

「俺のこと、誰から聞いたの」

「名前が明かせませんが、お知り合いのお知り合いと言ふことで。早速ですが、本題に入ります」といつて、またしているのは雑誌の名前を出して取材意図を告げた。警戒したとたん、男の口調が前向きになり、会うことに同意した。金に困つていてと言ふのは本当らしい。今池に住んでいると言ふことだ。

私は、今から訪問すると告げて電話を終えた。交際の前で服装をチェックした。紺のブレザーにグレイのパンツ。何とかフリーのルポライターに見えなくもないだろう。警官や役人に見えさせない方がいい。ちよつと考え、ネクタイだけ外してブレザーのポケットに入れた。

ののみちルポライターも探偵も大した違いはない。金のために調査をし報告書を書く。それが読者のためか、依頼人のためかの違いだけで、やくざな浮き草稼業には違いない。

続きは近日発売予定の『バラの刺青(タトゥー)』でお読みいただけます。

機械恐竜現る!の作り方

murbo

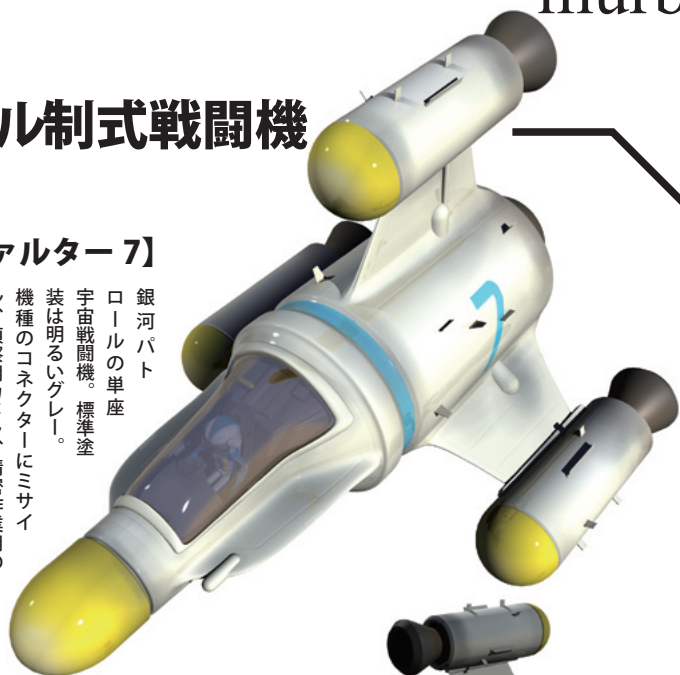
第2回

銀河パトロール制式戦闘機

ヴァルター 7

【ヴァルター 7】

銀河パトロールの単座宇宙戦闘機。標準塗装は明るいグレー。機種のコネクタにミサイル、偵察用カメラ、精密作業用の腕など、さまざまなユニットを取り付けることが出来る。宇宙キッドはゴース追跡中に金属怪獣たちに撃墜された。後に宇宙科学研究所SMDで修理され、その時の調査によって宇宙キッドのサポート銃、レーザーバルカンなどの装備が開発された。



【ミサイルユニット】

高機動スラスター付の誘導爆弾。爆散吸収剤の効果で破壊した目標の飛散を最小限に留める。



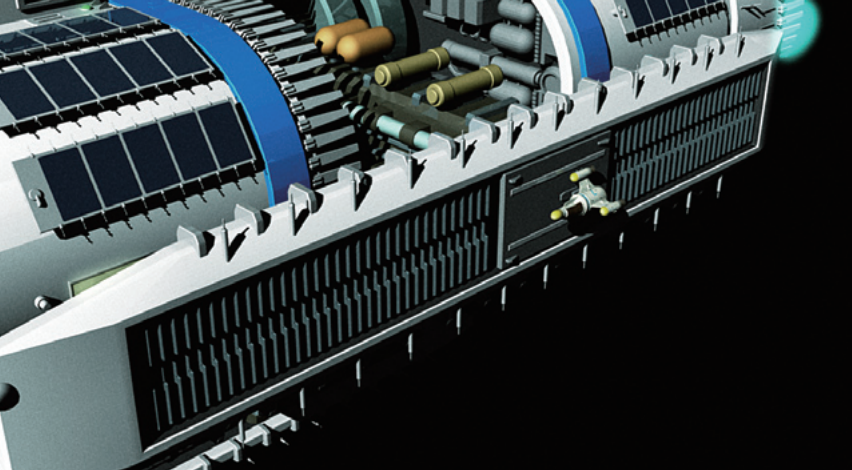
【アームユニット】

作業用装備。宇宙船の修繕などに利用される。カメラユニット装備と組んで強行偵察なども行う。

【カメラユニット】

偵察用装備。全周囲映像を撮影するカメラと通常仕様より高度な情報を収集出来る各種センサーを内蔵している。





カタパルトを含むヴァルター7格納ユニットは、固定式で作戦によって発射カタパルトを変更する。

【ヴァルター7ブルー】



ヴァルターシリーズ
主任設計師 メア
リー・ハルトマン
現在、ヴァルター9
を設計、開発中。



宇宙魔人ゴーストの戦いで大破した後、地球の環境に合わせて改修した。カラーリングも明るいベージュから青の濃淡のカモフラージュに再塗装された。



【ミサイル】

機首のマルチコネクターに接続するミサイル。

大型ミサイルの中に50発の小型ミサイルを内蔵し、大型ミサイル発射後、機動性の高い小型ミサイルが四散する。
宇宙船ロボを倒すために急遽作られた。



【粒子光線砲】

機首のマルチコネクターに接続する粒子ビーム砲。細い粒子を高速で撃ち出して目標を叩き割る。粒子が高速で発光しているのでレーザーのように見える。
精神破壊ロボ戦で使用。

ヴァルター7ブルーにオリジナルのユニットパーツを取り付けられるように再設計された。

【ヴァルター7レッド】



アンドロイド羊は電気人間の夢を見るだろうか？ 〈羊〉た

ちは今朝も愛想を振りまきながらやってくる。さあ、みなさん、きょうもいい天気ですよ。食事の準備がととのつています。今朝のメニューはみなさんの大好きな――

〈羊〉たちは親切だ。われわれ地球人は太陽系から七百万年以上はなれたこの惑星でな不自由なく暮らしている。五百組の夫婦と、子どもが百十数人。仕事はない。ただ遊んでいるだけでいい。ぜんぶ、〈羊〉たちがやってくれる。娯楽施設は過剰なほどととのつている。自然条件もすこぶるいい惑星だ。われわれはただ、毎日気ままに、のんびりと、好きなことをやって過ごしている。

もつと
も、これが
われわれの

アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか？

仕事と言えば仕事だ。〈羊〉たちの世話を受けながら、この究極のリゾートに、ただ滞在しつづけるだけ。会社が希望者を募った。申し込みは殺到した。当選した家族は、それで一生分の運を使い果たしてしまったにちがいない。

〈羊〉たちも、地球人のように夢を見るらしい。じつのところ、彼らは地球の羊にはあまり似ていない。むしろ、人間にちかい。直立二足歩行の、ヒューマノイドである。身長は三メートル前後。ただ、全身がふかふかとした白い毛に覆われている点がわれわれとちがうところだ。その毛から上質のウールがでさええる。

弾射音

だが、ウールの原料を皮膚から生産していても、彼らが地球人とおなじ知性をもつ生物であることにはかわりはない。

ひよつとしたら、〈羊〉たちは眠れぬ夜、地球人が一匹、地球人が二匹とかぞえるかもしれない。だが、ここで〈羊〉たちの世話になっているわれわれは、たとえ地球へ帰還したとしても、眠れぬ夜に羊の数をかぞえることは二度とないだろう。羊の数をかぞえてほくそえむのは、会社の上層部の連中だ。

〈羊〉たちと交易の協定を結ぶのにはひどく苦労したらしい。だがお互いに利益となる条件を発見することができた。そして会社は〈羊〉たちの生産物を大量に輸入することができ、一部の社員
の家族
は永遠
のバカ
ンスを
手にいれ、〈羊〉たちはみずからの嗜好を大いに満足させるじつに効率のいいシステムを実現することができた。

〈羊〉たちは信じられないくらいやさしい。地球人の流儀で笑顔をつくることを習得してわれわれに微笑みかけ、頼みもしないことまでしてくれる。子どもたちには受けがいい。まるでマスコットのような白い毛むくじやらの顔に愛敬のある表情を浮かべて、おどけてみせたりする。

地球へ帰りたいか？ そう妻に聞いたことがあった。ええ、とても。妻はこたえた。でも、地球へ帰っても、わたしたちは

二度とまともな暮らしにはもどれないでしょう。ここでの自堕落な生活に浸りきってしまったから。ふたたびあくせくと毎日を過ごすことなど、できるものですか。ここはパラダイスだわ。
〈あれ〉さえないければ、ほんとうに、文字どおりのパラダイス。

〈あれ〉さえないければ。

そろそろ〈あれ〉がはじまる季節だ。

妻と息子を連れ、緑豊かな丘陵地をハイキングしていて、ふと気がついた。妻はすでに数日前から不安げな表情だ。息子は無意識にからだのあちこちを掻いている。わたしの全身にも、かすかな痒みが。これから一日ごとに、痒みはごくゆっくりとひどくなっていく。

ここはリゾートか？ こんでもない。そう思いこむように、われわれはみずからを強いているだけだ。

ここは牧場なのだ。ただし、人間が運営する、羊の牧場ではない。〈羊〉たちが地球人たちを放牧している。

人間牧場だ。

そして、地球人のからだはリソマ菌牧場だ。

地球人のからだがこの惑星のリソマ菌の繁殖にもっとも理想的であることが判明したのは、ほんとうに偶然だった。会社の上層部がそれを利用しないはずがあるだろうか。リソマ菌はわれわれの体内で異常繁殖し、群体を形成して、一定期間ごとに系状になってわれわれの皮膚をびつしりと覆い、服の下で四六時中うごめくようになる。それが〈羊〉たちの大好物だ。われわれ地球人がいなければ、リソマの糸ははるかに貧弱な大きさの、

この惑星で最大の貴重品のままだったのだ。

害はない。ものすごく痒いだけだ。だから、会社はわれわれを〈羊〉たちに売ることができたのだ。われわれが死ぬほどの痒みと、全身糸だらけになってその糸を〈羊〉たちがよだれを垂らしながらいていねいにひっこぬいていくのを我慢さえすれば、われわれに終わりのない休暇を与えてくれた会社に多大の利益をもたすことができるのだ。

とつづく昔に絶滅した地球の羊のかわりに、この惑星の〈羊〉たちから上質のウールを手に入れることによって。

『アンドロイド羊は電気人間の夢を見るか？』は、『ぱおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2』からの転載です。

ぱおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MW4ZC78>

弾射音既刊本

パッチワールド

人格シミュレーションとなった村田は独自の理論を実証するため、恒星間宇宙船を乗り取りヒアデス星団で実験を再開する。地球を破壊した謎の結晶体による地球再生の可能性を突き止める。……クリス・ボイスの名作『キャッチワールド』へのオマージュ。第一回 SF 新人賞候補作を加筆。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>



クラフトロン 弾射音短編集 SF 編

「クラフトロン」…夫のテリーは旅先の地球で他の観光客もとも消息を絶ち、私は軍人として捜索を命じられる。変異に地球は飲み込まれ、私はついにテリーの真実を知る……。他三篇。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MP4I8JE>



今度、死ぬことになった 弾射音短編集 ミステリ編

「今度、死ぬことになった」…私は大学時代の友人から、「今度、死ぬことになった」という文面の手紙を受け取る。そして死んだ。彼は恨みを持つ女のマンションに爆弾を仕掛けたと遺言を残す。……他二篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MOZXM22>



理由なき朝食 弾射音ショートショート集 Vol.1

夜中の三時、ママはぼくをいきなり起こす。真顔で朝食を食べなさいと言うのだ。パパとお姉ちゃんはパニックだ。そのうちに、みんなは泣きながら真夜中の朝食を始める……。他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MUQJGT8>



ぱおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2

暇だったので、象と猫のハイブリッドを作ってしまった。巨大な象猫は元気に「ぱおにゃん！」と鳴く。妻は今すぐ捨ててきなさいと言う。ぼくはいったいどうしたらいいのだろう？……。他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MW4ZC78>



デイズ・オヴ・ホミサイド

殺人が犯罪ではない近未来。簡単に殺し合う人々。加藤芳雄はある日、吉田美枝子を地下鉄内で殺す。政府のコンピューター内に蘇った吉田美枝子は、逆に芳雄を殺そうと反撃に打って出る。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKDQSLA>



彼女の手の中のバービー

彼女はいきなり僕の顔に化粧をした。僕は彼女の手で、どんどん女になっていくー美人女子大生と女装少年の、奇妙な愛のかたち。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWY6ISQ>



レイルウェイ、ターミナル、そして故郷へ

僕は棺桶職人。ある日、大変なことに気づいてしまう。いどうが手許にないのだ。人は、いどうるなしでは人は生きていけない。僕は、いどうるを取り戻すため、故郷へ向かって旅を始める。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKCJPR0>



栗林元既刊本

神様の立候補／ヒーローで行こう！

西本は広告会社の営業。彼に下された使命は、新聞用選挙広告を法定回数五回分を全て東海新聞の扱いで獲得すること。ところがその候補者は、「龍神様のお告げで立候補を決意した」というお婆あちゃんだったのだ。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00IB9F4OE>



1988 獣の歌／他 1 編

気がつくと、「獣」は新生児の心の中にいた。今まさに殺されようという瞬間だった。間一髪、肉体から抜け出した獣は、少女の心に飛び込んでいた。しかし無理な跳躍で、多くの記憶を喪失してしまう。他 1 篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00KK5I61U>



孟蘭盆会●●●参り（うらばんえふせじまいり）他 2 編

18 歳を目前にした仁は「明日のお参りにはお前も来なさい」と、父から告げられる。話によれば長男は兄弟の中でも比較的早く「お参り」に連れていかれるのだという。果たしてそのお参りとはどのようなものなのか。他 2 篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00NCD05MK>



murbo 既刊本

宇宙キッド 怪獣図鑑 魔人ゴース編

架空の連続 TV アニメーションである、宇宙キッドに登場する敵怪獣などをカード風のレイアウトで紹介する図鑑。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EM4ST80>



宇宙キッド 怪獣図鑑 ドーモル団編

架空の TV アニメ、宇宙キッドに登場する敵怪獣のカード風のデザインで紹介する図鑑。第二巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00F0CFGVQ>



戦え！宇宙キッド 怪獣図鑑 超電子頭脳ズレイノウン編

架空の TV アニメ、宇宙キッドの敵メカ怪獣をカード風で紹介した図鑑。第三巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00HRW3ELG>



巻末付録『機械羊のAR』

機械羊の 3DCG モデルの AR（拡張現実）をスマートフォンで見ることが出来ます。

この AR は Junaio というアプリ（無料）に対応しています。<http://www.junaio.jp/download> からダウンロードしてください。対応 OS は iOS と Android です。

【鑑賞方法】

(1) の QR コードと (2) のマーカーをプリントアウトして机などに置いてください。

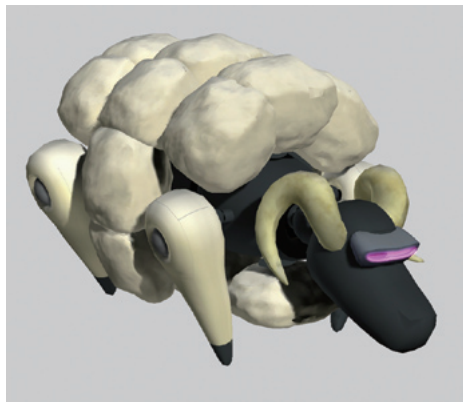
Junaio を起動して QR コードをスキャンします。スマホのカメラを QR コードに向けてください。アポリオン 3 の 3DCG データがダウンロードされます。少し時間がかかりますのでお待ちください。

その後、マーカー画像にスマホをかざします。機械羊が机の上に現れます。

(1) QR コード



(2) マーカー



電子パブは 広告を募集 しています。

一枠 55mm x 55mm。

一回料金 1,000 円

年契約 10,000 円

240dpi 以上の解像度、

cmym モードの

psd フォーマットのみ受付けて
います。

詳細と受付は

denpub@1001sec.com へ。



2015 年 1 月 1 日 編集発行／電子パブ

<https://www.facebook.com/groups/729158773822355/>

デザイン・編集／murbo 禁無断転載・複製・転載